

あづまぢの道の果てよりも、なほ奥つ方に

生まれ育つた

田舎びていただろう

生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、

完了・連体

過去推量・連体

はじめた ことであるか

いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語と

過去・連体

断定・連用

あるそうである

いふもののおんなるを、いかで見ばや

伝聞・連体

と思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉、継母

などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏

のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、

いとどゆかしさませれど、わが思ふままに、そらに

いかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきまま

に、等身に薬師仏をつくりて、手洗ひなど

して、人まにみそかに入りつつ、「京に疾く

たくさんごいいますと聞いている

上げ給ひて、物語の多く候ふなる、

丁寧 伝聞・連体

お見せください

ある限り見せ給へ。」と、身を捨てて

尊敬

お祈り申し上げる

額をつき、祈り申すほどに、十三になる

謙譲

(都に)上ろう

年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちと

意思・終止

いふ所に移る。

遊びな楽しんできた

年ごろ遊びなれつる所を、あらはにこほち散らして、

完了・連体

霧が立ちこめている

たち騒ぎて、日の入り際の、いとすぐ霧りわたりたる

存続・連体

目をやった

に、車に乗るとて、うち見やりたれば、人まに

完了・已然

お参りする ぬかずいた

は参りつつ、額をつきし薬師仏の

謙譲

過去・連体

立つていらつしやる お見捨て申し上げる

立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、

尊敬 存続・連体 謙譲

人知れず 泣けてきてしまった

人知れずうち泣かれぬ。

打消・連用 自発・連用 完了・終止